

「九かあ……」

次の公式戦に向けて背番号が配られた。その背番号を見て、坂口はニヤケつつ、地平線の向こうにうつすらと赤さが残る時間に家路へとついていた。

中学三年間で、初めて貰ったレギュラーナンバー。最後の大会で、ギリギリのところを手に入れたチャンス。なかなか芽が出ない。それでも、諦めて勉強に集中しろなんていわず、家族は応援し続けてくれた。喜んでくれるだろう。そう思うと自然と笑みがこぼれてくるのだった。

坂口の家は校区の一番端に位置する。途中までは誰かしらと一緒に帰るのだが、最後は一人になる。だから、気持ち悪いなんてことは言われない。好き sadece ニヤケてらられるのだ。

しかし、こういう普通じゃない時に限って邪魔をされるものだ。

「あれ？ 坂口じゃん」

後ろから声をかけられる。坂口は心の中で舌打ちし、振り返る。そこにいたのは、同じ小学校で、私立の中学に進学した、金子だった。

「ぶっ……ハハハハ……」

金子は失礼にも坂口の顔を見ると、吹き出し、笑い出した。

「何、そのゆるみきった顔」

坂口はしまったと思った。ニヤケ顔を止めるのを忘れていた。

「なんでもない」

金子のいる方向と逆の方向に顔を向ける。そして、顔を整える。

「お前、なんでスカートなんてはいてんだよ」

「私は女だ」

金子は怒って見せる。

小学校時代の金子は百パーセントズボン。野山を駆け、常に生傷を作っていた。だから、女の子という認識がなかった。肌の色も男のように黒かったのだが、今は勉強ばかりしているのか、透き通るような白さだ。

「すまんすまん。てか、久しぶりだな」

「そうだね。小学校卒業以来かな？ 家もそんな離れてないのに会わなかったね」

「……………」

「……………」

沈黙が二人を包む。何を話したらいいのかわからない。久々に会ったのだから、話すことはたくさんあるはずなのだが、喉から先にでてこないのだ。

坂口はというと、男っぽかった金子が、女の子らしくなって現れた。男の自分から話しかけるべきだと坂口は思っているのだが、やはり言葉がでてこないのだ。

「ねえ坂口」

そんなくだらないことに悩んでいるとその前に金子が言葉を発した。

「私の学校で流行ってる、この市に伝わる吸血鬼の話知ってる？」

「吸血鬼？」

坂口は素っ頓狂な声を上げる。

「吸血鬼と言え、あれか？ 西洋の血を吸うあれか？ 血を吸われたら吸血鬼になるというあれか？」

「そうそう、その吸血鬼。最近、話題になってるの知らない？」

「聞いたことないけど……」

そんな話を聞いたことない。

「そうなんだ。でも、最近、人が襲われてるんだって」

家に帰ると、ご飯を食べて、風呂に入って、すぐに寝る。そして起きると、朝ご飯を食べて、朝練に行く。勉強なんて二の次だ。宿題は学校で終わらす。そんな生活をしてきたから、ニュースなんて見ないし、新聞は読まない。だから、最近のトピックスには疎いのだ。

「襲われた人は同じように首筋に二つの小さな穴が空いて、血液が少し取られるんだって。で、被害者は同じように前後の記憶がなくなってるんだって。怖いね」

そうは言うものの、金子は「怖い」というよりもその話を楽しんでいるという感じだ。

「しかも、時間帯はこの時間くらいなんだってさ」

それには少しビビった。しかし、現実ではない。そう思った。吸血鬼なんておとぎ話。現実に存在するわけではない。

「びびってる？」

「そんなわけないだろ。吸血鬼なんて存在するわけないからな」

「そういえば、この吸血鬼の話にはもう一つあるんだよね」

金子は坂口の前に回り込んで、一つ指を立ててみせる。

「その事件が起きる前に赤い雨が降るんだってさ」

坂口は、そうなんだと納得しかけたが、少し考えるところがおかしな点に気が付いた。

「ちよっと待てよ。さっき前後の記憶がないっていつてなかったけ？」

そうなのだ。金子は前後の記憶がないと言っていた。なのに、赤い雨が降る話は皆覚えているらしい。明らかな矛盾だ。

これは作り話確定。嘘の話だと一人納得した。

「そうなんだけど、なんかその雨の話だけは覚えてるみたいなんだよね。服にも無数に跡が残ってるみたいだし」

金子はなんとか話を繋げてるように見えた。坂口を怖がらせる。そのために。しかし、今頃動揺しているに違いない。矛盾があり、指摘されたのだから。

「信じてないでしょ。襲われても知らないよ」

「はいはい」

坂口は軽く流してみせる。もう金子の話すべてが嘘、作り話のように聞こえてくる。

(ポタっ……)

突然、坂口の顔になま暖かいものが落ちてきた。それを手で拭うと、少し粘っこい。そして……赤かった。

「これは……血？ なんでこんなところで血が？」

そして、一粒ではない。二粒、三粒……そして、どしゃぶりのように降り注ぐ。

「なんだよ、これ。悪い冗談だろ」

坂口はさすがに動揺した。赤い血。赤い雨。頭の中で線と線が繋がった。

「金子逃げるぞ」

坂口は金子にそう促す。その瞬間――

(バシッと腕をつかまれた)

金子にだ。坂口の周りで雨が降っていたはずなのに、金子は濡れていない。そして、金子の白い腕は血の雨で朱に染まっている。

「坂口、なんで逃げるの？」

坂口は引き寄せられる。野球部の坂口が抵抗できなほどのすごい強い力だ。

声が出ない。恐怖すると声が出ないものだ、

そのうちに、坂口と金子は抱き合う形になる。

「私、坂口のが好きだったんだよ。だから、今日のことは忘れない。私も坂口も」

坂口は答えない。金子の口の中。犬歯が異常に飛び出しているのに気が付いたからだ。

「私、ずっと……ずっと……」

逃げだいたい。坂口は抵抗し続ける。

「――血が吸いたかったの」

坂口は目をさまし、起き上がる。すごい汗だ。

「夢でよかった」

と、一息つくと、周りの視界が鮮明になるものだ。見慣れない部屋に、着慣れてない服。ここは病院っぽい。

「まさか……」

坂口は首筋を触る。小さい穴が二つ空いていた。

「ああ……」

坂口の絶叫が病院内に響き渡った。